

大阪府教育委員会 令和2年度完了報告書

1. 調査研究概要

令和元年度より、5市町7小中学校の実践校において、年間指導計画や校務分掌を見直し再構成したり、実践校がテーマとする学びのつながりを確認したりすることなどを通し、主に、各実践校の教育活動の質の向上を図ってきた。

令和2年度は、各実践校が、令和元年度までの自校の取組みから編成した教育課程を元に、実践、評価、改善を行い、他校が教育課程の編成や改善に取り組む際に、年間を通した具体的なカリキュラム・マネジメントの在り方が分かるように、大阪府教育庁が実践校の調査研究結果について、事例を手引きとしてまとめた。その際に取り組んだ内容は以下のとおりである。

- (1) 各実践校における研究テーマに沿った実践と検証
- (2) 各実践校の研究内容を共有、協議・検討するための「カリキュラム・マネジメント検討会議」の開催（年2回）

【手引きの構成】

手引きの作成にあたっては、カリキュラム・マネジメントについての基礎的な知識の理解を深めることができるページを作成するとともに、各校の研究について、カリキュラム・マネジメントに関わる三つの側面それぞれに対応した取組みごとに章立てし、「児童や学校、地域の実態を把握すること」、「教職員全員で取り組むこと」、「取組みの内容や成果を発信すること」の3つの視点を共通の軸として取りまとめた。

また、カリキュラム・マネジメントの実現に向けて読者の課題がどこにあり、どのページから読み進めるとよいかを図で示した「カリキュラム・マネジメント Yes/No チャート」や、調査研究校が実践を進めるにあたって、苦勞したことや実感したことについて、Q&A形式で質問に答えた「Q&A インデックス」を作成し、他校でも取組みを進めてみたくなるような工夫をした。手引きの構成は次表のとおり。

第1章 カリキュラム・マネジメントを知ろう

- カリキュラム・マネジメント Yes/No チャート
- “カリキュラム・マネジメント”って何だろう？
- カリキュラム・マネジメント Q&A インデックス

第2章 カリキュラム・マネジメントの実現に向けた実践事例とその工夫について

カリキュラム・マネジメントの3つの側面を通して、教育活動の質の向上を図ろう

- (1) 教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていく事例
- (2) 教育課程の実施状況を評価してその改善を図る事例（PDCA サイクルの構築）
- (3) 教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制の確保とともにその改善を図る事例

第3章 カリキュラム・マネジメントのための参考資料集

第2章で紹介した調査研究校の実践事例の中で実際に活用したワークシート等を参考資料として第3章にまとめ、他校でも活用できるようにした。本手引きは、全編PDFデータと

して作成し、大阪府のホームページ上に公開する。他の学校の教職員がタブレット端末等を使って、「いつでも、どこでも参考・活用できる手引き」として使用できることをねらいとした。

今後、教職員がカリキュラム・マネジメントの意義を理解し、その効果を実感しながら、各校の実態に応じて学校全体で組織的に取り組みを進めることができるように研修等を通して手引きの内容を広めていきたいと考えている。

<新型コロナウイルス感染症対策下で調査研究の取り組みが生かされたこと>

令和元年度からカリキュラム・マネジメントについての取り組みを進めていたことで、新型コロナウイルス感染症による臨時休業などの不規則な状況の中でも、次のような場面で、カリキュラム・マネジメントの調査研究が生かされた。

- カリキュラム表の見直しを進めるにあたって、学期ごとに、意見を出し合いながら「成果と課題」を明らかにしたり、前年度の学年担任とともに次学期のカリキュラムの見直しを行ったりしていたので、各学年のやりたいこと、めざす姿が見える化できていた。
- 国語を要とした授業づくりを通して、つけたい力を意識した逆向き設計の授業改善が進み、新型コロナウイルス感染症による休業があっても対応できた。
- 今年度、新しく来た教職員ともイメージが共有しやすく、どの教職員も同じ方向に向かって学校全体の取り組みを進めることができた。
- 昨年度も食育に取り組んでいたが、単発の取り組みになっていた。今年度は、教科横断的な視点で取り組みを進められるようになり、休業期間中の課題を工夫して学びの保障にもつなげることができた。

(実践地域における年間実施スケジュール)

| 月 | 取組内容 |
|-----|--|
| 5月 | |
| 6月 | 実践校訪問（府）※新型コロナウイルス感染症対策により中止（以下同様） |
| 7月 | 実践校における成果の検証（アンケート等） |
| 8月 | 第1回カリキュラム・マネジメント検討会議（府）（3日（月）） （指導助言：大阪教育大学 田村知子教授） |
| 9月 | 実践校訪問（府）※ |
| 10月 | 実践校訪問（府）※ メールにて各実施校の進捗確認 |
| 11月 | 第2回カリキュラム・マネジメント検討会議（府）（25日（水）） （指導助言：大阪教育大学 田村知子教授） 文科省 Web ヒアリング（26日（木）） |

| | |
|-----|-------------------------------|
| 12月 | 実践校における成果の検証（アンケート等）、手引き原稿作成 |
| 1月 | 実践校における研究授業等、手引き原稿作成 |
| 2月 | 実践校における研究授業等、手引き編集 |
| 3月 | 手引きの完成・普及（Webアップ）、今年度の取組みのまとめ |

2. 調査研究の内容

実践校【 枚方市立第一中学校 】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

- テーマ ①自信をもって学べる子どもの育成
②「表現力（＝きいて考えたことを自分の言葉で説明できる力）」・
「コミュニケーション力（＝多様な考え方を持つ人たちに対し、自分の意見を臆せず伝えて合意形成を図る力）」の育成
③主体的・対話的な学びの実現による学力向上

(2) 調査研究の内容

研究仮説

「自己肯定感を高める教科の授業実践 - 『わからない』と言える教室づくり」に取り組む、全教科領域において、教科等横断的に組織として取り組む教育課程を編成することで、上記①～③の資質・能力をもった生徒の育成ができるだろう。

(i) 自己肯定感を高める教科の授業実践 - 「わからない」と言える教室をめざす

●全国学力・学習状況調査の活用

令和元年度の結果分析から1年間取り組んできたことをチェックし、関西外大・坂本暢章教授の助言に基づき、今年の結果と今後の取組みを保護者に公表した。

→「学級集団づくりを教育の重点に据え、安心して自分の考えを話すことができ、教室で学習できる環境づくり」、「生徒が必死で考えたい、取り組みたいと思う課題や場面を設定し、『今までに学んだこととつながっている、わかる』と思える」授業づくり等

●授業で提示する課題・問いの工夫

学校のランドデザインを横浜国立大学高木展郎名誉教授の助言のもと作成し、全職員が「学校としてつけるべき資質・能力」を共有し、その資質・能力を育成するために、グループで納得解を出せる、他者の考えを聞きたくなる等の課題・問いの工夫に取り組んだ。また、総合的な学習の時間を軸としたカリキュラム・マネジメントをすることで、複数教員が教科の壁がない状態で協働して発問を練り上げることができ、それぞれの教科の発問や課題の見直しにつながった。

【例】

- 12月数学 「正多面体が5種類しかない理由をレポートでまとめ、発表しよう」
- 12月冬休み 「好きなお正月料理をKeynoteでまとめ、自分の意見を伝えよう」

- 1月英語 「keynoteで他己紹介を作成し、自分の言葉で伝えよう」
1月～総合 「未来の職業を創造しよう」（keynoteで資料をまとめて発表する）

●総合的な学習の時間を中心としたカリキュラム・マネジメント

各学年が各学期でつけるべき資質・能力をまとめ、全教員で共有することで、3年間の目標を持つことができた。総合的な学習の時間にて、各教科で培った力を発揮できるよう、生徒の学びを教科等横断的にマネジメントすることで、生徒は生き生きと学びを進めることができた。また、各教科でどの時期にどのような力をつけたかを把握できるよう、職員室後方に単元配列表を提示している。学年会では、総合的な学習の時間の課題や発問、学び方を練り上げており、その議論の中で各教科での取組みを共有することができた。

●4人をベースにした学習形態

自分の考え・周りの考えを聴き合えるよう4人をベースにした学習形態を構成した。周りの人の考えを聴く楽しさ、自分の考えを持つ大切さを意識させること、自分の考えを言って受け入れてもらえることで安心して学べることをめざした。複数教科で学校のグランドデザイン達成をめざした発問工夫をし、互いに学び合う集団作りを推進することで、生徒の学び方に変化が起きていると多くの教員が感じ取ることができた。

●表現の幅を広げるツールの活用

考えたことやアイデアをかき出すこと、自分の考えと周りの考えを比較しながら、自分の考えを新たに形成する思考ツールとしてホワイトボード（45cm×60cm）を導入し、活用した。また、iPadひとり一台環境の整備に伴い、GoogleClassroomやkeynoteなどの表現を共有できるツールを積極的に活用し、考えを表現する機会を増やした。

上記のようなことを週1回の教科会で協議し、相互の参観を活用、指導方法の確認、課題や問いを蓄積するように努めてきた。

●情報の発信

新学習指導要領や総合的な学習の時間の新しい取組み、ICT機器の活用などについて通信を発行し、学校の取組みを発信することで、生徒・保護者にも協力を要請するよう努めた。

(ii) その他の取組み

●学級集団づくり

特別活動において校外学習など班で判断・行動させる場面を設定するなど、生徒が自己肯定感を高め、学習の基盤となる資質・能力の育成には学級集団の成長が欠かせないとの認識から学級集団づくりを進めた。また、修学旅行をはじめとする校外学習の在り方を見直し、「どこに行くのか」ではなく「何を学び、何を習得するのか」という視点で生徒の学びをマネジメントする試みを始めている。

●先進校視察

集団づくりや教科横断等を意識したカリキュラム・マネジメントの取組みを行っている学校へ教員を派遣。→視察交流会において共有(神戸大学附属中等教育学校(11/19))

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

成果

●生徒の姿の変化

12月実施学校アンケート【5件法】 肯定的回答

| | H30 | R01 | R02 |
|-------------------------|------|------|------|
| 落ち着いた雰囲気の中で授業を受けることができる | 36.3 | 45.9 | 64.5 |
| 授業で、他の人の考えを聴くのは楽しい | - | 58.0 | 69.1 |
| 自分にはいいところがあると思う | - | 58.6 | 61.0 |

R02 総合的な学習の時間に係るアンケート【4件法】 強い肯定回答

| | 6月 | 8月 | 12月 |
|--|------|------|------|
| 授業で学んだことをほかの学習に生かしていましたか | 47.4 | 43.0 | 51.7 |
| 話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり、広げたりすることができる | 45.6 | 68.6 | 60.3 |
| 自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していたと思いますか | 35.7 | 32.6 | 37.7 |
| みんなで話し合っって決めたことなどに協力して取り組み、うれしかったことがありますか | 59.6 | 68.6 | 65.6 |

研究1年目は「自信を持って、自分の意見を言うことができない」「意見をぶつけ合うことができない」などの課題が多く見られた。しかし、学校のグランドデザインに基づき、「自分の意見」を言う機会を各教科担当が教科等横断的に持ち続け、「自分の考えに間違いはない」と言い続けることで、生徒は安心して意見を出せるようになり、意見を出す必要性を感じるようになった。指導方法を工夫すれば、子どもの力は伸ばすことができ、「できない」ことも「できる」ようになることを目の当たりにすることができた。また、アンケート結果でも、職員がねらいとしている項目で成果を見取ることができた。特に、学校アンケートの「落ち着いた雰囲気の中で授業を受けることができる」という項目では、教科等横断的に協働する場面を設けたことにより、大きく数値が伸びた。また、複数教科にて同じベクトルを持った授業内容を展開することにより、生徒にとっては「つけるべき力」が明確になり、より主体的に粘り強く学びに向かうようになった。

●教員の変化

生徒の学び方が変化したことにより、「大人（教員）の指導方法が変われば子ども（生徒）が変わる。そして、子どもが変われば大人が変わる。」という成功体験を得ることができ、より力強く取組みを推進することができた。また、総合的な学習の時間を軸にカリキュラムをマネジメントすることで、総合的な学習の時間において生徒がより考えを巡らせる課題・発問を、教科の壁を越えて学年全体で協議することにつながった。そして教員がその課題・発問の工夫を自らの教科の参考とし、各教科の授業が生徒に主体性を持たせ、つけたい資質・能力を意識するよう改善されることは、本校において大きな進歩であった。

課題

●聴き合う関係を構築し、自己肯定感を高める

| 【12月学校アンケート】 | | | |
|--------------------------|-----|------|--------------------|
| 「自分にはよいところがあると思う」 | R01 | 58.6 | → R02 61.0 (+2.4) |
| 「落ち着いた雰囲気です授業を受けることができる」 | H30 | 45.9 | → R02 64.5 (+18.6) |

研究仮説で使用した指標であるアンケート項目「自分にはよいところがある」では、肯定的な回答が+2.4ポイントとなった。また、課題や発問を工夫して生徒に主体性を持たせ、より活発な協働的な学びを進めることで研究テーマに示した力をつけようとした結果、「落ち着いた雰囲気です授業を受けることができる」の項目が+18.6ポイント大幅に上昇した。このまま取組みを推進し続けることで、「自分にはよいところがあると思う」の項目も徐々に上昇していくのではないかと考えている。

●学校の文化に落とし込む（一過性のものにならないようにすること）

前述のアンケート結果でも示した通り、学校アンケートの肯定的な回答はほぼすべての上昇しており、取組みの成果が伺える。一過性のものにならないよう、この取組みを組織的に継続し、経年比較や同一集団比較までできるレベルまで学校の「文化」にまで落とし込み、今後本校は「教科等横断的な視点を持って、生徒の資質・能力を育成していくこと学校」といえるよう研究を続けていきたい。

●9年間を見通した小中の取組み

コミュニケーション能力を育む取組みを校内で共有し、校区小中学校9年間で共通した教育環境を整えていくために、本校のランドデザインや取組みを小学校に発信したが、新型コロナウイルスの影響もあり、校区小中学校が集う場面が減少したため、検討・研究が滞ってしまっている。児童・生徒が9ヵ年をマネジメントされた教育課程で、より効果的に校区がつけたい資質・能力を育成するため、さらなる連携が不可欠である。

今後の改善のための方策

●教室で「わからないから教えて」を「公用語」にする取組みの継続

協働的な学びを進めることで「わからない」ということに抵抗を持たない文化が浸透しつつある。生徒の学びに対して過剰に教師が関わることで、教師と生徒のつながりを太くするのではなく、生徒と生徒のつながりを太くするための机間指導に努めることを、職員で共有する。

●教科会の見える化

週に一度の教科会で、教科内の授業改善の醸成は進んできたが、学校としてのベクトルをより明確にし、より教科等横断的な視点で生徒の学びをマネジメントする必要がある。そのため、総合的な学習の時間担当教員、道徳担当教員、教科主任会等の分掌や会議の在り方を見直すことで、より正確かつ迅速に取組みが進むようにする。

●学校全体でカリキュラム・マネジメントを進めるための方策

学校のグランドデザインを作成することを通し、第一中校区でめざす子ども像を児童・生徒、教職員、保護者ひいては地域で共有し、より焦点化した取組みをすすめるために、通信を作成し、生徒・保護者へ配付するとともに、ホームページでも公表してきた。

異動者が本校の取組み推進の一員となるために、毎年度末にグランドデザインに基づく総括、またグランドデザイン自体の見直し、そして、年度初めの校内研修にてグランドデザインを含む取組みの共有をすることで、学校全体でカリキュラム・マネジメントを推進していく環境を醸成していく。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

| 月 | 取組内容 |
|-----|--|
| 6月 | <ul style="list-style-type: none"> ・学校のグランドデザインを保護者に公表 ・総合的な学習の時間に係るアンケートの実施 |
| 7月 | <ul style="list-style-type: none"> ・生徒の姿をもとに、2学期の教育計画の再編成 ・外部知見を活用し取組みの進捗を確認 (関西外国語大学 坂本暢章教授による指導・助言) |
| 8月 | <ul style="list-style-type: none"> ・第1回カリキュラム・マネジメント検討会議への参加 ・「学力向上の取り組み News」(通信)を生徒・保護者へ発行 ・総合的な学習の時間に係るアンケートの実施 |
| 9月 | |
| 10月 | <ul style="list-style-type: none"> ・「学力向上の取り組み News」(通信)を生徒・保護者へ発行 |
| 11月 | <ul style="list-style-type: none"> ・市内学校公開、研究の取組み発信 (研究に対する指導・助言及びキャリア教育を通じたマネジメント研修(筑波大学 藤田晃之教授)) ・先進校視察(神戸大学附属中等教育学校) ・第2回カリキュラム・マネジメント検討会議への参加 |
| 12月 | <ul style="list-style-type: none"> ・学校アンケートの実施 ・総合的な学習の時間に係るアンケートの実施 ・「学力向上の取り組み News」(通信)を生徒・保護者へ発行 ・生徒の姿をもとに、2学期の教育計画の再編成 ・校内研修 先進校視察報告と来年度以降の校外学習の予定について |
| 1月 | <ul style="list-style-type: none"> ・外部知見を活用し取組みの進捗を確認 (関西外国語大学 坂本暢章教授による指導・助言) |
| 2月 | <ul style="list-style-type: none"> ・外部知見を活用し取組みの進捗を確認(関西外国語大学 坂本暢章教授) ・グランドデザインに基づく取組みの総括 |
| 3月 | <ul style="list-style-type: none"> ・学校のグランドデザイン作成 |

実践校【和泉市立信太小学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

テーマ 夢中で学ぶ子～学び合いを通して、自ら表現しようとする子を育む授業づくり～

(2) 調査研究の内容

昨年度、「聴き合い！響き合い！育ち合い！ ～豊かに学び合う教室をめざして～」というテーマで、ペアやグループ活動を通し、相手の思い・考えを受け入れ、自分の思い・考えも伝える心を育むための「聴き合う」活動を日々の授業の中に取り入れ、学び合う授業を展開した。その結果、児童アンケートの結果から、ペア・グループでの対話を通した学び合いが浸透しつつあるとともに、子ども同士のつながりが増え、自ら課題に取り組もうとする主体性についても一定の成果が見られた。しかし、同じく児童アンケート並びに府の力だめしテストの結果から、子ども同士のつながりは増えても、相手にわかりやすく自分の考えを表現することや興味を持って粘り強く、自分から聞いたり、考えたりすることに課題が見られた。そのため今年度は、研究テーマを「夢中で学ぶ子～学び合いを通して、自ら表現しようとする子を育む授業づくり～」と設定し、次の3つの視点をもとに、授業改善の取組みを進めた。

- 語彙力を育むこと
- 言葉を捉える力を育むこと
- 思考・表現する際に図解化し、思考の視覚化をめざすこと

【授業改善について】

取組みを進めるにあたり、つけたい力がついた子どもの姿を全教員が共有し、「何ができるようになったのか」「どんな力がついたのか」を客観的に見取るための単元末評価テスト・単元末アンケートを作成・実施することにより、客観的に成果を見取り、単元ごとに次のようにPDCAサイクルを回した。

- (P) 学習指導要領に基づき既習事項を俯瞰し、単元全体を通してつけたい力を設定した。
- (P) 「聴き合う・学び合う」関係性を授業でつくることをめざし、児童が「聴きたい」「考えたい」と思える課題設定に取り組んだ。
- (D) 全教員が事前研に参加し、教材の魅力や授業を視る視点を共有した。
- (D) つけたい力をつけるために、授業を実施した。
- (C) つけたい力が的確に身についたのかを見取るための評価テストと単元末アンケートを作成した。評価テストは思考・判断・表現を見取ることができる内容とし、単元末アンケートは子どもがイメージできる言葉で設問を作った。
- (A) 子どもが紡ぎだした表現に先生が価値づけるコメントを記した。

- (A) 子どものノートや紡ぎだした表現を教室に掲示・通信に載せるなど、表現を可視化した。取り組むとともに、つけたい力がついたかどうか評価するための評価規準・判断基準を指導案に明記するようにした。

上記のPDCAサイクルを回していく今年度の具体的な取組みを、5年生の算数の単元を例にとり、次に記載する。

○研究授業を行う際のPDCAサイクルの構築について（5年生算数の取組み）

- (P) 単元を実施する前に、本校の研究テーマ「夢中で学ぶ子～学び合いを通して、自ら表現しようとする子を育む授業づくり～」を、算数科の中で実現していくために、学習指導要領に基づき、既習事項を俯瞰しながら、5年生の教員で話し合った。題意を読み取り、数直線を書くことのできる児童は増えたが、そこから立式することができない児童もいる実態を踏まえ、単元を通して子どもにつけたい力を「割合を比べるのに、2つの数量の関係を数直線や式に表して考える力」と明確にした。子どもたちが自ら考えを表現したくなることを狙い、本時の課題として、子どもたちの日常生活に馴染みがある場面を設定した。また、本校の児童の課題である、複数の情報が混じった長文の問題を作成し、基本問題のあとに発展問題として取り組むこととした。
- (D) 単元を通し、「基にする量」「比べる量」の関係を正しく捉えること・図を使って立式の意味を説明することを大切にした。そのため、数直線を用いて考えることに取り組んだ。

事前研では、今までの子どもたちの学びを確認するとともに、「基にする数量をどのように見つけるか」「数直線をどのように使って考えるのか」という授業を視る視点を全教員で共有した。

本時では、

- ①今まで学習したことを活かさないかと考え、ノートを振り返る姿。
- ②数直線を使って、考えたり、説明したりする姿。
- ③分からないこと・困ったことを、自ら周りにたずねる姿。また、たずねられた人も相手を放っておかずに、相手が分かる言葉で何度も伝え直す姿。

が見られた。

事後研では、「数直線の描かせ方」「それまでの学年でどのような図を描かせておくか」など、図の系統性が課題としてあがった。また、「基にする数量」と「比べる数量」の関係を正しく捉えるためには、2年「かけ算」3年「わり算」「倍の計算」からの積み上げが大事だと再確認した。

- (C) つけたい力が子どもについたのかを見取るための評価テストを作成した。評価テストは思考・判断・表現が見取ることができる内容とした。テストの結果、言葉と数直線を用いて、思考したことを表現する姿がたくさん見られたが、基にする数量を見出す力には課題が見られた。

- (A) 図の系統性を考え、各学年で数直線につながる図を書かせながら、数量関係を把握させていく。低学年では数感覚が身につくように、図解化・具体物の操作を行う。また、ノートに教員が価値づけるコメントを書くことで、子どもたちは振り返りに「見方・考え方」が働いた言葉を書くことができるようになってきたので、価値づけるコメントの記入を引き続き行っていく。

【教科横断的な視点での取組み】

今年度当初に、新しく採択された教科書を基にした単元配列表を作成した。臨時休校の影響により、限られた時数の中で教育課程を編成する必要もあり、各教科を関連づけ、効果的な計画・実施をめざした。また、5月1日に「カリキュラム・マネジメントについて」の校内研修を行った。「つなぐ」をキーワードに、教科を関連づけることを再確認した。教科を関連づけることで、①学びを深めることができる ②時数を確保できることを共有した。そして、内容ベースでつなぐだけでなく、表現力に焦点を当て、資質・能力ベースで各教科をつないでいくことの大切さを共有した。

以下は、教科横断的な取組みの一例である。

- 3年生：国語科「メモを取りながら話を聞こう」の単元でつけた「メモを取り、大事なことを落とさず聞く」力を、社会科「和泉市めぐり」における消防署への見学の際に活用した。他にも、国語科「調べて書こう、わたしのレポート」と算数科「棒グラフ」を関連づけ、信太小学校のケガの種類と数をまとめた。
- 4年生：総合的な学習「手話・点字についての学習」で調べたことを、国語科「調べたことを報告しよう」の単元と関連づけて模造紙にまとめた。
- 6年生：総合的な学習の「平和学習」で調べたことを、国語科「世界に目を向けて意見文を書こう」の単元と関連づけ、事実・感想・意見を区別した文章を書くことに取り組んだ。

上記のように教科を関連付け、国語科で育成した表現力を他教科で活かしていくことで、子どもたちが、相手に分かりやすく自分の考えを表現できるようになってきた。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

【成果】

学校全体で取組みを進めた結果、教員アンケートにおいて

- ・「校内研究の必要性の理解や課題・学力向上の方策について同僚と共有し取組みにあたってきたと思う」という項目において、肯定的回答が100%
- ・「自校の研究主題を意識して授業づくりを行ったと思う」という項目において、肯定的回答が90.9%

学校全体で単元配列表・単元計画シートを作成し取組みを進めたことで、教員が見通しを持って取組むことができた。教員間において、学習したことが他の学年の学習内容とどのように関係するのか（各学年でのかけ算、わり算、割合、図の描かせ方）等の話し合いが増え、縦の系統性を意識するようになった結果、次の単元や他教科との関連も意識しながら授業を進めることができた。また、表現力に焦点を当てたことで、思考力や判断力を見取りやすくなり、教員にとっても、子どもについての力がわかりやすくなった。

また、社会性測定用尺度の6年生「わたしは、授業に主体的に取り組んでいます」の項目の肯定的回答の割合が、1学期76.3%⇒2学期79.5%へと増加した結果、下記のような子どもの姿を見ることが増えた。

- ・「ふりかえりに自分の考えを書ける」「〇〇な力がついた」と自覚する子どもが増えた。
- ・算数科で図解化することに力を入れてきたので、他教科においても、子どもから「図に表していいですか?」といった声が聞かれるようになった。

その結果、学校教育自己診断の下記質問項目において

- ・「学校は子どもの学力が定着するよう工夫している」
昨年度74.0%⇒今年度86.4%

というように数値が上昇し、保護者にも学校の取組みについての理解が進んだと考えられる。

【課題】

上記の成果が見られる一方で、依然として語彙力の低さ、算数科における技能の未習熟、言語を介した表現力に課題が見られる。また、学習に集中して取組めない状況も見受けられる。

【成果・課題から考えられる今後の展望】

- ・見方・考え方を系統立てることで、「〇年でもそう考えたから、いけるはずだ」と統合的に思考し、内容面での統合だけでなく、思考面での統合も期待できるので、学校全体で見方・考え方が働いた言葉を教室に掲示する。それにより、子どもたちの思考・表現のきっかけになることが期待できる。
- ・来年度は、各学年・各単元で働かせたい見方・考え方を整理し、見方・考え方をベースにした評価規準や課題の作成に取り組む。
- ・全教科を通じて、子どもにつけたい力を育成していくために、教科横断的な取組みをさらに進めるとともに、評価方法の充実を図る。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

| 月 | 取組内容 |
|-----|---|
| 5月 | 校内研修（カリマネ&学習評価） |
| 6月 | 事前研（6年生） |
| 7月 | 研究授業（6年生） |
| 8月 | 第1回カリキュラム・マネジメント検討会議への参加 校内夏季研（全国学力・学習状況調査の採点・分析） |
| 9月 | 事前研（2年生） |
| 10月 | 研究授業（2年生）（講師 佐藤 雅彰氏 富士学び工房代表） |
| 11月 | 事前研（4年生）研究授業（4年生）事前研（1年生） 第2回カリキュラム・マネジメント検討会議への参加 |
| 12月 | 研究授業（1年生） |
| 1月 | 事前研（5年生）研究授業（5年生）事前研（3年生） |
| 2月 | 研究授業（3年生） |
| 3月 | 1年間のふりかえり（成果・課題をまとめ、次年度の方向性を定める） |

実践校【 摂津市立摂津小学校 】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

テーマ「主体的に学び、高め合う子どもの育成
～子ども理解を基盤に、つながりに気づく学びをめざして～」

(2) 調査研究の内容

① つながりに気づき、つながりを生かす学び(教科横断的な指導)

仮説(1)

ねらいを明確にもち、教科等横断的な視点で授業をデザインするとともに、ねらいに迫るための手立てを講じることで、「つながりに気づき、つながりを生かす力」を高めることができるだろう。

【仮説（1）に関わる主な取組み】

- めざす子ども像に迫るために、「つながり」を生かす。
- 『子ども理解を基盤』に、「つながりを」生かした指導のねらいを明確に持つ。
- 昨年度の研究成果をまとめたカリキュラム表を基にして、年度初めに年間を見通した計画を立てる。
- 多様な視点（視野を広げて）から他教科等とのつながりを見いだす。
- つながりを生かした指導のねらいを明確に持ち、それに迫るための手立てを講じる。
- 関連のある各教科の「見方・考え方」について研究する。
- 言語活動（アウトプット）の充実に引き続き取組み、その手立ての研究を進める。

② 学習のゴールを明確に持ち、それに迫る学習指導（授業改善）

仮説(2)

学習のゴールイメージを明確にし、それを児童と共有できるような学習指導を行うことで、自ら進んで考える児童を育むことができるだろう。

【仮説（2）に関わる主な取組み】

- 摂津小学学習スタンダードを見直し、組織的に児童主体の授業づくりを進める。
- 評価規準の具体化によって、学習のゴールを児童と共有することに取り組む。

③ 主体的に学び、高め合う教職員集団（70人力）

仮説(3)

各学年と学校全体のPDCAサイクルを連動させ、研究の成果や課題を実感しながら取組みを進めることができるような体制を整備することで、教職員自身が主体的に学び高め合うことができるだろう。

【仮説（３）に関わる主な取組み】

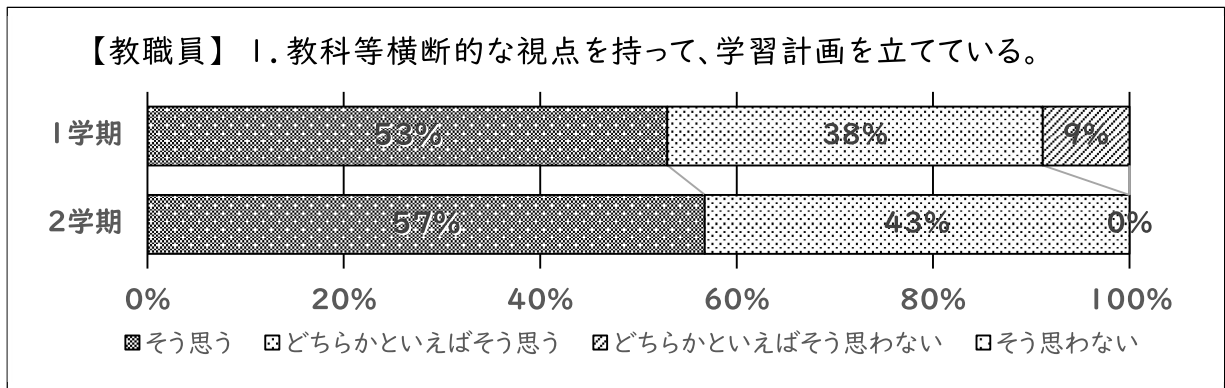
- 各学年の研究の成果と課題を伝え合う取組み（「見える化」）を改善し、各学年と学校全体のPDCAサイクルを連動させながら研究を進める。
- 研究の評価指標を明らかにし、その成果と課題を児童と教職員がともに実感しながら取組みを進められるようにする。

（３） 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

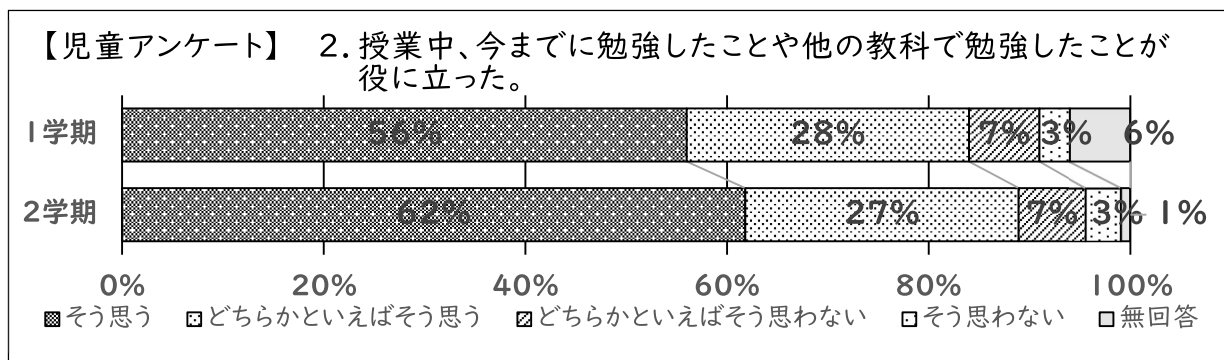
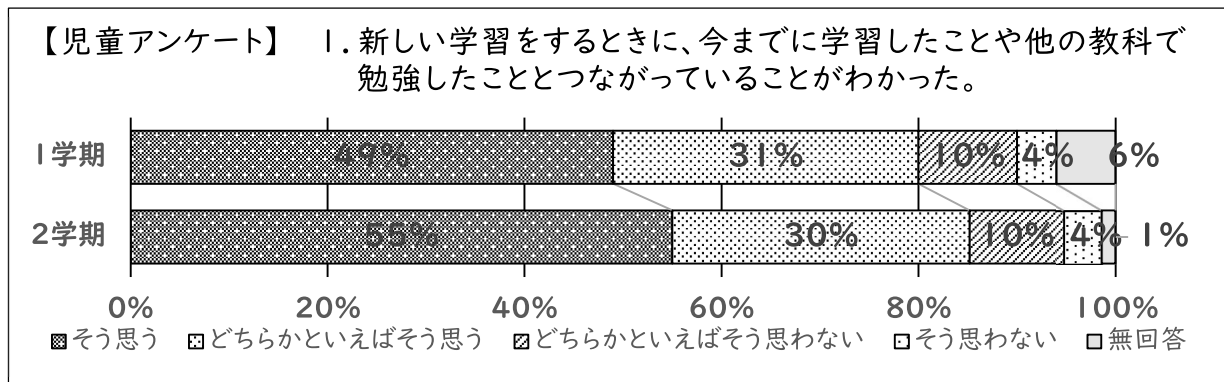
① 「つながりに気づき、つながりを生かす学び（教科等横断的な指導）」に関する成果

- 新型コロナウイルス感染症対策に伴い、授業時間の確保や年間を見通した指導が困難な状況の中で、昨年度の取組みの成果を生かし、教科等横断的な視点で年間指導計画を再編成し、計画的に授業を行うことができた。また、学期ごとに、児童の実態を踏まえて計画を見直すといったPDCAサイクルの取組みによって、学校教育目標やめざす子ども像を意識した授業づくりに取り組むことができた。

- 「教科横断的な視点を持って、学習計画を立てている。」と考える教職員が、2学期末に100%となり、他教科との関連を生かして授業をデザインすることに学校全体で取り組むことができたことがわかる。



- 児童の「つながりに気づき、つながりを生かす」姿をめざし、「見通し」や「ふりかえり」の場の改善や、学んだことを活用する場の設定などの取組みが進んだ。これらの取組みの成果が、児童アンケート（次ページ）の
 - ・「今までに勉強したこととつながっていることがわかった。」肯定的な回答85%、
 - ・「今までに勉強したことが役に立った。」肯定的な回答89%という結果に表われた。



○ 各学年で児童の実態を踏まえた重点目標を設定し、それに迫るための年間を通した取組みが行われた。取組みの課題や成果を次の取組みに生かすことを積み重ねることで、児童の見方や考え方、表現の仕方などを高めることができた。

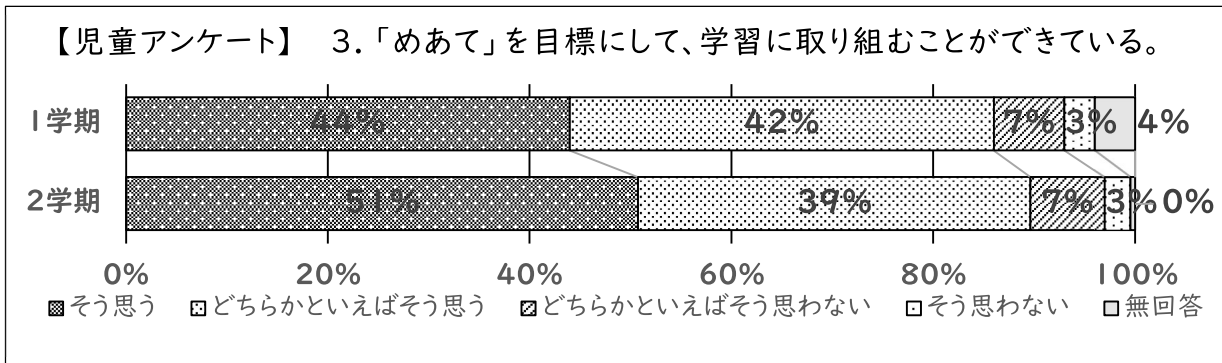
- ・ 生活科・総合的な学習の時間…気づきや考えの深まり、広がり
- ・ 国語科…相手意識をもった表現の工夫 など

○ 『「ねらい」と「こだわり」をもってつなげる』をテーマに、関連付けるそれぞれの教科の目標をふまえ、めざすゴールを明確にすることに取り組んだ。特に、国語科で身に付けた思考ツールを用いた情報の整理の仕方や、話し方、聞き方、話し合い方などを生活科や総合的な学習の時間の学習に生かすことで、活動内容をふりかえる視点を明らかにして自分の考えをまとめ、他の人と考えを交流することができるようになり、児童の考えを深めたり広げたりしながら教科の目標に迫ることができた。

②「学習のゴールを明確に持ち、それに迫る学習指導」に関する成果

○ 学習のゴールを児童と共有することをめざし、授業の「めあて」の内容や提示の仕方を工夫することができた。また、児童が見通しを持ち、主体的に学習に取り組む姿をめざし、学習計画を提示する取組みも進んだ。

このことによって、『「めあて」を目標にして、学習に取り組むことができている。』という問いに対して、「そう考える」と回答する児童が51%となり、肯定的な回答が90%となった。



○ 学習のゴールに迫るために、学習過程における「交流」の場の指導改善に取り組むことができた。国語科「話すこと・聞くこと」領域で学習した、話し方、聞き方、話し合い方などを生かすことで、各学年の実態に合った「交流」の場となり、系統的な指導を行うことにも役立った。

○ 「ふりかえり」についての研修を行い、教員自身が「ねらい」を持って、児童に学習内容をふりかえらせることに取り組んだ。授業の感想ではなく、これまでの学習と関連付けたり、次の学習や生活に役立つことを考えたりする姿が見られるようになった。

③「主体的に学び、高め合う教職員」に関する成果

○ 「見える化ボード」に各学年の学習の様子や成果を掲示するとともに、それに対するリアクションを掲示する取組みが進み、児童自身が学習の成果を実感できることにつながった。

○ 学期ごとに、前年度の担任と協力してカリキュラムを見直す研修の場を設定することで、初めて担当する学年の学習に対しての見通しを持つことができた。

【今後の課題】

① めざすゴールをより明確にすること

他教科に視野を広げて授業をデザインする意識の高まりとともに、複数の教科を関連付けたり、長期間に及ぶ学習計画になったりする傾向が生まれ、学習内容の1つのまとまりが、複雑になってしまう傾向にある。また、学校教育目標、関連付ける教科の目標、学年の児童の実態と、ゴールを設定するためにふまえなければいけない要素が多く、ゴールを明確にもつことがより難しくなっている。そこで、教科横断的な授業デザインについての研究をさらに進め、ゴール設定の仕方やゴールに確実に迫るための手立てについて整理し、本校のモデルとしてまとめていきたい。

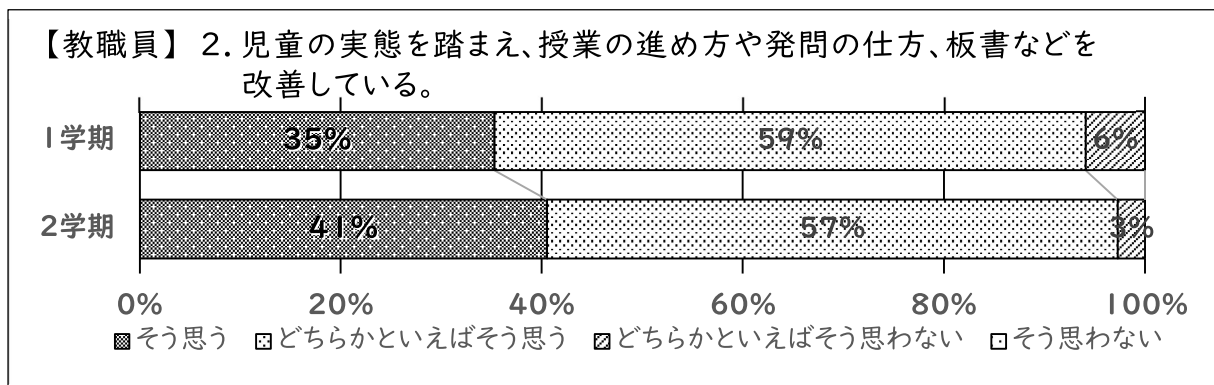
② 『〇〇したいを実現するスキル』を身に付けさせるための「しかけ」と「手立て」を講じること

甲南大学の村川雅弘教授にご指導いただいた11月の校内研修において、

- ・教師の「ねらい」を、児童の「〇〇したい」「〇〇できるようになりたい」という思いの込められた「めあて」に転換していくこと。
- ・『〇〇したいを実現するスキル』を身に付けさせること

が本校の新たな課題であると共通理解できた。この新たな課題に取り組むために、「摂津小スタンダード」としてまとめた本校の学習過程を見直し、意図的な「しかけ」や「手立て」を講じられるようにしたい。

③ 日々の授業改善に、組織的・計画的に取り組むこと



教職員アンケートにおいて、「児童の実態を踏まえ、授業の進め方や発問の仕方、板書などを改善している。」という問いに対し、98%が肯定的な回答をしており、本校の教職員が意欲的に児童のために日々努力していることがわかる。しかし、学年団で協力して作成した授業デザインや学習計画を実践する場である日々の授業づくりについては、個人任せになってしまっているという実態がある。1人ひとりの教職員を支え、高め合うことをめざし、児童の学ぶ姿の見取り方や効果的な発問の仕方、板書の仕方などについての研究に、組織的・計画的に取り組んでいきたい。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

| 月 | 取組内容 |
|-----|---|
| 5月 | 【研修】授業改善（授業の導入、めあての提示） |
| 6月 | 【研修】年間指導計画の見直し |
| 7月 | ◇授業アンケートの実施・分析 【研修】1学期の成果と課題と2学期の取組み |
| 8月 | 第1回カリキュラム・マネジメント検討会議への参加 |
| 9月 | 【研修】授業改善（ふりかえり） |
| 10月 | 【研究授業】第2学年 生活科 |
| 11月 | 【研究授業】第3学年 総合的な学習の時間、第6学年 総合的な学習の時間 【研修】カリキュラム・マネジメントの実践（講師：甲南大学 村川雅弘教授） 第2回カリキュラム・マネジメント検討会議への参加 |
| 12月 | ◇授業アンケートの実施 【研修】2学期の成果と課題と3学期の取組み |
| 1月 | ◇摂津市学力定着度調査 |
| 2月 | 【研究発表会】（講評・講演：大阪教育大学 田村知子教授） ◇授業アンケートの実施 |
| 3月 | 【研修】今年度の成果と課題と次年度に向けて |

実践校【 枚方市立招提小学校 】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

テーマ ◆国語科を中心とした言語能力育成を図る授業についての研究

【対話を通して、よさやちがいを認め合い、気づきを深め合える子どもの育成】

(2) 調査研究の内容

【国語科を中心とした言語能力の育成を図る取組み】

- ① 国語科を中心とした各教科等横断の言語能力育成に向けたカリキュラム研究及び年間指導計画の作成・実施・評価・改善

児童の実態から設定した課題を基に、学校教育目標・研究テーマと照らし合わせて、児童に身につけたい資質・能力の柱（1年次：話す力・聞く力の育成→2年次：共有する力）を決め、それに基づき、各学年の系統的な指導を学校全体で行った。

○学校教育目標『ともに生きる子』

○研究テーマ【対話を通して、よさやちがいを認め合い、気づきを深め合える子どもの育成】

| 児童に身につけたい資質・能力の柱：共有する力 | |
|------------------------|-----------------------------------|
| 第1学年 | 自分の考えや思いを持つ。 |
| 第2学年 | 感じたことや分かったことを共有する。 |
| 第3学年 | 感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方の違いに気づく。 |
| 第4学年 | 互いの感じたことや考えたことを理解し、他者の感じ方のよさに気づく。 |
| 第5学年 | 意見や感想を共有し、自分の考えを広げる。 |
| 第6学年 | 意見や感想を共有し、自分の考えを広げ、深める。 |

年間単元配列表を基に、つけたい力の育成に向けて、国語科と各教科等の指導を関連させて計画を立てた。その際、国語科で身につけた言語能力を他教科等でも活用、または国語科で不足している力を他教科等の指導で補うようにし、言語能力育成の機会を増やした。各学年の年間指導計画は、誰でもいつでも見られるように、職員室に掲示し、教職員の意識の向上を図った。

➡ 2学期中頃に計画の進捗状況と今後の指導内容を協議・検討するブロック学年会（低・中・高学年の2学年担任+担任外+支援学級担任で構成）を実施した。

検討した内容は年間指導計画に加筆し、職員室内に掲示して見られるようにし、指導改善の意識向上に役立てた。全教職員が情報を共有し、各学年のつながりや教科等間のつながり、単元間のつながりを意識して指導に当たることができた。

②外部講師を招聘した、平素の授業改善に向けた校内研修及び研究授業・研究協議会・研究発表の実施

○学校再開時期に合わせて、国語科の授業づくりについて、全教職員で共通理解を図り、共通意識を持つため、講師に京都女子大学の水戸部修治教授を招聘し、校内研修・ビデオによる研究授業・zoomによる研究協議会を実施した。

➡研修や研究授業、協議会で学んだことを各クラスで実践し、ビデオに録り、ブロック学年会を使って、ブロックによる授業研究を定期的に行った。

➡2学期には、体育館を使って国語科研究授業・協議会、研究発表を行った。市内各校1名の先生方に参加いただき、本校の実践の紹介、共有ができた。本校の研究を振り返って検証し、3学期に向けて研究をさらに進める良い機会となった。

○2学期の始まりに合わせて、カリキュラム・マネジメントの理論の学び直しと、本校の実践の見直し、今後の課題への共通認識を持つため、講師に大阪教育大学連合教職大学院の田村知子教授を招聘し、校内研修を行った。

➡教科等横断的な指導の大切さを再確認できたことと、総合的な学習の時間の活用例を学べたこと、教員のカリキュラム・マネジメントだけでなく、子ども自身がカリキュラム・マネジメントを行うことが必要なことなどを学んだ。

➡研修を生かして、各学年で教科等横断的な単元を計画し(国語科と総合的な学習の時間を軸とした単元計画)、「どんな言語能力を身につけたか、または活用できたか」といった視点での振り返りの充実を図った。

➡研修を生かして、子ども自身のカリキュラム・マネジメントを促進するため、学んだことを画用紙にまとめ、教室掲示して蓄積し、授業内で触れることで、子ども自身が身につけた力を自覚し、意識して活用できる手立てとした。

③「招提小オリジナル系統表」の作成

1年次・2年次の国語科の授業研究を基に、各学年で実施した言語活動や身につけた言語能力を系統的にまとめた「招提小オリジナル系統表」を作成した。

➡各学年の学びが系統的に確認でき、6年間を通してどのように力をつけていけばよいかが見通せるようになり、授業実践・授業改善に役立った。

④言語能力向上を検証する「招提チャレンジ(大阪府教育庁「ことばのちから」を活用した学期末テスト)」の実施及び結果分析・授業への活用

2学期に招提チャレンジを行い、言語能力の定着度合を検証した。正答率や無回答率など、結果を全教職員で分析し、課題については授業内でテスト問題の解説を行った。身につけていないところを授業内で取り扱ったりして、力の定着を図った。今年度は授業時数確保のため、モジュールの取組みも導入した。モジュールの時間を使った言語能力育成の取組みも、全体での実施ではないが、各学年で実施した。

⑤児童の言語能力に関する意識・学習状況等の学期ごとの検証

児童へのアンケートを実施し、定量的評価を授業改善に役立てた。特に、着実に言語能力を身につけている学年の実践を細かく分析し、言語活動の設定の仕方や、めあての立て方、振り返りの方法、授業内で大切にしていることなど、他の学年の授業改善の参考になるように分析結果をまとめて、全教職員で共有した。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

成果

○教科等横断的単元の学習を通して、子ども自身が国語科で学んだことを他教科とつなげて考え、身につけた言語能力を活用するようになってきた。

【子どもの振り返り】より

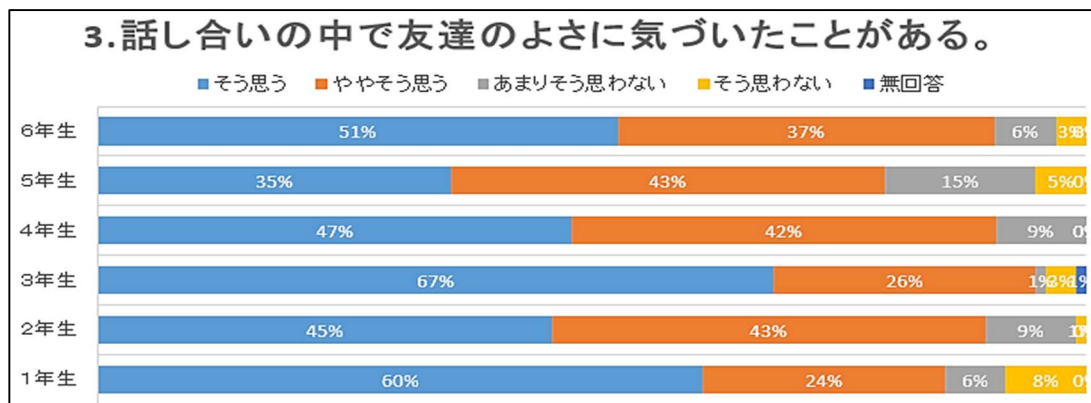
「国語で資料の効果的な使い方を勉強したので、総合的な学習の時間で調べる時に、自分にどんな資料が必要かが分かった。」

「国語でやった司会の方法を使ったら、(体育の)作戦を決める時にケンカなくて、みんなで上手に話し合えた。」

「社会で平和について学んだ。国語の朗読の勉強で学んだことを使って、下級生に絵本の読み聞かせをして平和の大切さを伝えたい。」

○国語科を中心として、各教科等横断的に言語能力を育成し、対話を重視した結果、研究テーマに掲げた目指す子ども像「よさやちがいを認め合う子」に近づいてきた。

【2学期児童アンケート】より

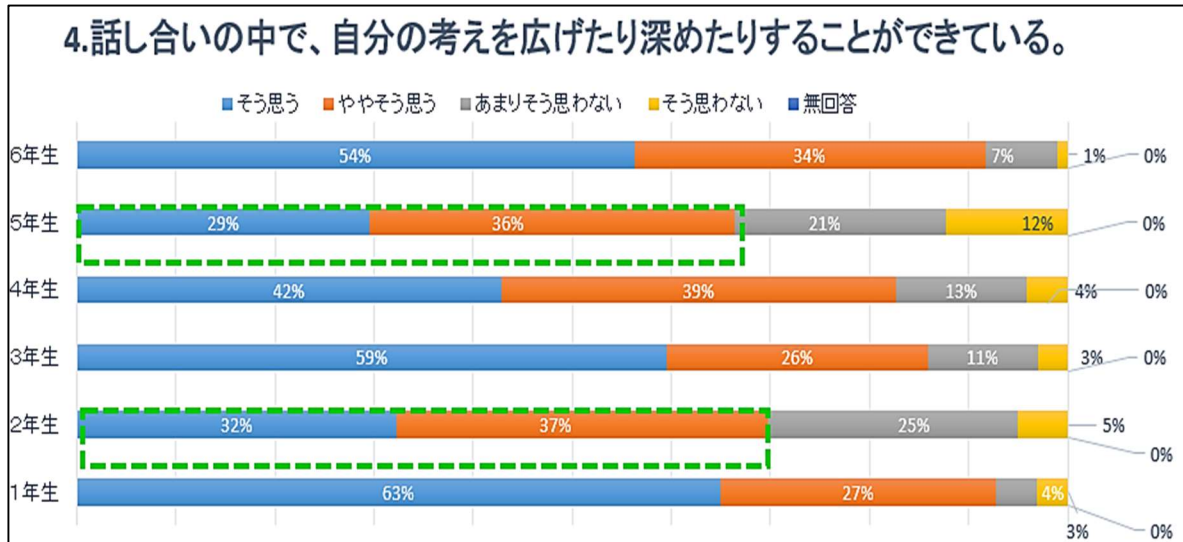


・肯定的回答の割合が前回7月の70%台から80~90%台へと伸びてきた。

課題

○研究テーマに掲げためざす子ども像「気づきを深め合える子」に対しては、学年によるばらつきが見られるため、授業改善の余地が考えられる。

【2学期児童アンケート】より（次ページ）



- ・強い肯定的意見65%～90%と学年によるばらつきがある。
- ・前回7月と比較すると、全学年、少しずつ肯定的回答が上昇している。

改善方策

【授業改善の視点から】

○話し合い活動では、意見の理由や根拠まで互いに聞くようにし、友だちの考えからの気づきが増えるようにする。また、ふり返りを充実させ、友だちの意見を聞いて「自分がどのように変わったか」や、「友だちの意見で取り入れられそうなもの」を考えて書くように、全学年で指導に当たる。

【カリキュラム・マネジメントの視点から】

○国語科の授業だけでなく、各教科等、特に総合的な学習の時間や行事とも関連して単元を計画することで、子どもたちの交流の場や活躍の場を増やし、互いに学び合うことのよさや、さまざまな場面での気づきを得られるように指導計画を立てていく必要がある。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

| 月 | 取組内容 |
|-----|---|
| 5月 | 臨時休業時における児童への学習課題の提示方法の交流、検討 各学年（各ブロック学年）の研究年間計画作成 |
| 6月 | 校内研修「質の高い言語活動を位置付けた国語科の授業づくり」 講師：京都女子大学 水戸部修治 教授 |
| 7月 | ビデオを用いた国語科研究授業（第6学年）・zoomを用いた研究協議会 講師：京都女子大学 水戸部修治 教授 児童アンケート実施・結果分析 |
| 8月 | 第1回カリキュラム・マネジメント検討会議への参加 校内研究通信の配付 1学期の取組の総括及び2学期の取組の立案・確認 |
| 9月 | 校内研修「子どもの学びとカリキュラム・マネジメント」 講師：大阪教育大学連合教職大学院 田村知子 教授 |
| 10月 | 各学年（各ブロック学年）の研究年間計画の見直し |
| 11月 | 国語科研究授業（第4学年/市内公開）・研究協議会・研究発表会 講師：京都女子大学 水戸部修治 教授 招提チャレンジ(学期末テスト)実施 第2回カリキュラム・マネジメント検討会議への参加 |
| 12月 | 招提チャレンジ結果分析 児童アンケート実施 2学期の取組の総括及び3学期の取組の確認 |
| 1月 | 児童アンケート結果分析 |
| 2月 | 国語科研究授業（第5学年）・研究協議会（マトリックス法×短冊法） 講師：京都女子大学 水戸部修治 教授 招提チャレンジ(学年末テスト)実施 児童アンケート実施 研究紀要作成 |
| 3月 | 招提チャレンジ(学年末テスト)結果分析 児童アンケート結果分析 年間の総括・次年度の研究の企画、立案 |

【年間】
 ＊学年会 各ブロック学年会におけるビデオ授業研究 教材研究
 ＊「招提小オリジナルシステム表」の作成と授業実践



実践校【和泉市立北池田小学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

テーマ「進んで対話し、自分の考えや思いを持ち、豊かに表現する子どもの育成」

(2) 調査研究の内容

【今年度の取り組み】

昨年度、校内研究のPDCAサイクルの充実や校内の人的資源の活用に取り組んだ結果、「目的や意図に応じて、複数の資料から自分の考えを持ち、表現する資質・能力」の育成には一定の成果が見られた。その一方で「知識・技能」の定着や豊かに表現する力（表現の質）については課題が見られたことから、今年度の研究テーマを「進んで対話し、自分の考えや思いを持ち、豊かに表現する子どもの育成」と設定し、次の2本の柱を取組みの中心とした。

【取組みの中心】

- ①校内研究授業のPDCAサイクルの充実による授業改善
- ②国語科を要とした教科横断的な取組み・単元の提案

【校内研究のPDCAサイクルの充実による授業改善の取組みについて】

昨年度、「単元を通した言語活動」の充実に取り組んだ結果、上記のような成果が見られたが、国語科に対して子どもたちが主体的に取り組む姿に、まだ課題があることがわかった。そのため、今年度は、子どもたちにとって魅力的な言語活動を設定し、子どもたちにとって課題解決型となるような単元計画を提案・検証することとした。そこで、以下の3つの視点に重点を置いた単元（授業）の提案を各学年で行った。

- ・子どもたちの主体的な姿を重視して、子どもたちが目的を持って取り組むことができる学習過程の工夫
- ・「知識・技能」の定着
- ・対話の質の向上

緊急事態宣言による臨時休校の影響により、全学年での研究授業の実施は困難であったが、4学年で研究授業を実施した。

昨年度実施して効果的だったため、研究授業に向けた取組みとして、今年度も引き続き学年を①先行授業クラス②本時クラス③リフォーム授業クラスの3つの役割に分けた。

学年の担任団と学力向上担当教員が協力して作成した授業プランを、まず先行授業クラスで実践し、子どもたちの反応を見て授業プランを改善した後、改善した授業プラン

を本時クラスが実践し、さらに本時クラスの実践を受けて修正した授業プランをリフォーム授業クラスで実践した。また、4年生以上の学年では研究授業後に単元末アンケートや単元末問題を実施することにより、子どもにつけたい力がついているか、定量的に成果を検証した。

作成した学習指導案には、単元の学習が終わった後の成果と課題、児童の姿（単元末アンケートや単元末問題の結果・言語活動での様子）なども記載し、取組みが検証できる形でデータベースに保管することにより、次年度に同じ単元を実施する際の参考となるようにし、PDCAサイクルを常に回すことができるようにした。

今年度の研究授業では、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、本時クラスの授業の様子を動画で記録し、その動画を児童の資質・能力の向上に向けて「北池田小学校としてよりよいリフォーム授業を生み出す」ことを目的に、教員が「自分ならどうするか。」「どんな手立てが必要か。」などの視点から視聴した後に研究討議会を行った。子どもたちの対話の様子を動画に記録することで、繰り返し視聴することができ、子どもたちの細かな様子を丁寧に見取ることができた。単元の中でも短いサイクルでPDCAサイクルを充実させることで、子どもたちにつけたい力は何か、常に考えながら授業づくりに取り組むことができた。

なお、昨年度の研究推進に効果的であった学年の担任団・学力向上担当者の共同研究体制や子どもたちの姿を見取るための全国学力学習状況調査や学期末力だめし問題（4年生以上）の全教員による採点分析も継続して行った。

【国語科を要とした教科横断的な学習の提案】

昨年度の実践の課題に対して、国語科でつけた力を繰り返し使うことで、その力の定着をはかる必要があるということをも全教員で共通理解していた。そこで、今年度は本校で取り組んでいる国語科の研究を生かし、子どもたちが国語科でつけた力を使い、広げる機会を設定することで国語科の力の定着を図るという教科横断的な取組みの提案を、各学年から行うこととした。

その際に、次の2点をねらいとした。

- ・国語科でつけた力を活用する場を設定することで、つけた力の定着を図る。
- ・国語科でつけた力を活用することにより、他教科でつけたい力をより効果的につける。

例として、3年生では国語科の学習でつけたインタビューメモをとる力を生かして社会科でスーパーマーケットの店員さんにインタビューをし、適切にメモを取ることで自分の知りたい情報を聞き落とさないようにするという学習をした。

また、5年生では国語科でつけた力を「日本の文化を留学生に伝えよう」という総合的な学習の時間で生かすという取組みを行った。この総合的な学習の時間に取り組む中で、国語科でつけた話し合いの力や印象的に話す力などを活用する場面を設定することで、総合的な学習の時間のねらいをスムーズに達成できるようにした。その結果、教員から「国語科で学んだ話し合う力を意識させるために、大切なことを掲示して活動の前

に確かめたり、活動後に振り返ったりした。繰り返していくうちに、話し合ったことが活動につながりやすくなり、計画的に進めることができた。また、同時期に国語科で進めていた、話し合う時のキーワード、「納得」「反対」「疑問」「促し」も意識させることにより、より意見の出やすい豊かな話し合いができた。」という感想が出るようになった。

これらの取組みを通して、子どもたちに身につけさせたい資質・能力の向上に向けた授業改善の視点をそれぞれの教員が意識することができた。また、国語科でつけた力を他の教科で子どもたちが国語科の学習とのつながりを意識して使うことにより、他教科のねらいの達成に効果的であることを教員が実感することができた。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

【成果】

○教員の授業改善に関する意識の高まり

教員アンケートにおける「校内研究の必要性の理解や課題・学力向上の方策について同僚と協力し取り組みにあたってきた」の項目の肯定的回答は92.1%、「校内研修を通して、同僚と協力して取り組むことで、自分自身の授業力・資質向上につながった」の項目の肯定的回答は92.8%であった。昨年度3学期に実施した教員アンケートの同じ項目に対する肯定的回答がそれぞれ100%であったことに比べると、肯定的回答の割合は低下したが、1学期は臨時休校の影響もあり、校内研修が十分ではなかったことを踏まえると、昨年度からのPDCAサイクルを充実させた校内研究の取組みの成果であるとも考えられる。2学期からは、本格的に校内研究を充実させていくことができたため、先の2つの項目の肯定的回答の割合も上昇するとともに、肯定的回答の内訳も大きく変化した。

- ・「校内研究の必要性の理解や課題・学力向上の方策について同僚と協力し取り組みにあたってきた」

「そう思う」の回答割合

1学期 39.3%（肯定的な回答92.1%）→ 2学期 63%（肯定的な回答96.3%）

- ・「校内研修を通して、同僚と協力して取り組むことで、自分自身の授業力・資質向上につながった」

「そう思う」の回答割合

1学期 57.1%（肯定的な回答92.8%）→ 2学期 70.4%（肯定的な回答96.3%）

このように、校内研究を実際に進めていく中で、教員が主体的に授業改善に取り組む意識が高まった。

また、今年度の国語科の授業作りの際に意識した「知識・技能の定着」に関しても教員の意識の高まりが感じられた。昨年度も単元の計画を立てる際には、学習指導要領を根拠にしたマトリックス表を使用し、単元の目標を立てそれに向けた授業作りを行って

いた。昨年はどちらかという思考・判断・表現の読むことや書くことに重点をおくことも多かったが、今年度は知識・技能の領域でのつきたい力にも重点を置いた単元づくりが行われた。

○児童の資質・能力の向上

2学期末に過去のデータと比較できるようにH31年度の全国学力・学習状況調査の問題を使ってテストを行った。

平成31年度の報告する文章を取り扱った問題を5年生で実施したところ、記述の問題において正答率が全国平均を上回った。（全国 28.8% 本校 5年 36%）

また、各単元末に実施した単元末評価問題における記述問題において、誤答の内容に変化が見られた。昨年度までは校内研究の取組みもあり「何とかして解答を書こう」と記述の問題にも前向きに取り組む姿勢が見られた結果、無回答率は下がったが、誤答の中には正答とかけ離れたものも少なくなった。それに対して、今年度実施した単元末問題の記述問題では、正答ではないもののあと一步のところまで正答に近づいているものが増えた。

これは研究テーマ「進んで対話し、自分の考えや思いを持ち、豊かに表現する子どもの育成」に向けて、国語科の単元全体を通した言語活動を意識した授業作りを進めることで、児童の表現力が高まってきた結果であると考ええる。

○児童の意識の変化

PDCAサイクルを充実させて国語科の授業作りを中心とした校内研究を進めることで、児童の国語科に対する意識が少しずつではあるが向上している。

研究テーマの実現に向けて、国語科の授業作りの中で意識した3つの視点のうちの1つである「対話の質の向上」に関する2つの児童アンケートの項目において、下記のように向上が見られた。

- ・「友だちとの間で話し合う（交流する）活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることが出来ていると思う。」の項目
肯定的回答：1学期 82% → 2学期 85%
- ・「授業で『このことについて聞きたい』や『このことを解決したい』といった目的を持って、話し合うことが出来ていたと思う」の項目
肯定的回答：1学期 71% → 2学期 79%

これらは、授業改善の視点を全教員が共通理解して取り組んだ成果であると考ええる。

【課題】

○国語科を通してつけた力を生かす、広げること（児童）

今年度、本調査研究の取組みの2本目の柱として「国語科を要とした教科横断的な学習の提案」を各学年より行った。子どもたちが国語科でつけた力を意識して他教科での学習に取り組むことで、国語科でつけた力の定着・深化と他教科でつきたい力をより効

率的に実現することをめざして取り組んだが、児童アンケートの「国語の授業でついた力が、自分の考えを持つことやうまく伝えるために役立っていると思う」の肯定的な回答は1学期80%⇒2学期82%と微増にとどまった。

今年度、国語科を要とした教科横断的な学習の充実に取り組んでいるが、子どもたちが、国語科で学習したことが他教科の学習でも有効であると実感できるようになるためには、さらに場面設定等研究を深めていく必要がある。ただし、肯定的回答が増加したことから、取組みの方向性は間違っていないと考える。

【今後について】

○他教科への広がり

本校はここ数年間、国語科の校内研究を通して、つきたい力を意識した授業作りについての研修を積み重ねてきた。本年度は、国語科でつけた力を繰り返し使うことで、国語科でつけた力の定着を図るとともに、他教科でつきたい力をスムーズに育成することを目的に、国語科を要とした教科横断的な学習の提案を行った。しかし、国語科の研究の積み重ねがあるために、どうしても授業を見取る際に、国語科の力の定着の側面で見取ってしまうということがあった。今後は国語科の力の定着だけでなく、他教科でつきたい力が効果的に育成されていたかという観点で授業を見取れるようになることをめざす。

また、さらなる授業改善や子どもたちの資質・能力の向上を図るため、つきたい力を明確にすることや、つきたい力をつけるための単元計画の作り方など、国語科の授業作りで学んできた授業作りの視点を、国語科以外の教科の授業作りにも生かしていく。

○取組みの「見える化」

今年度、教科横断的な学習の提案を通して、教科と教科を結びつけた授業を、指導案という形で、その取組みが見えるようにした。指導案という形をとることで、教員が取組みを理解しやすくなり、学校全体で取り組む事ができた。そのため、グランドデザインや今年度作成した指導案なども参照しながら、指導案として教科のつながりや取組みが見える化することを継続し、誰でもいつでも取組みを実践することができるようにする。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

| 月 | 取組内容 |
|-----|--|
| 5月 | |
| 6月 | 全体研修①（テーマ 対話の質の向上に向けて） 児童アンケート・教職員アンケート |
| 7月 | 全体研修②（全国学力学習状況調査 採点分析） |
| 8月 | 第1回カリキュラム・マネジメント検討会議 全体研修③（カリキュラム・マネジメント研修） （指導助言：大阪教育大学 田村知子教授） |
| 9月 | 校内研究授業4年 教科横断的な学習の提案 3年 教科横断的な学習の提案 2年 |
| 10月 | 校内研究授業1年 |
| 11月 | 学期末力だめしテスト ・児童アンケート・教職員アンケート 力だめしテスト 採点・分析 第2回カリキュラム・マネジメント検討会議への参加 |
| 12月 | 校内研究授業5年 教科横断的な学習の提案 5年 |
| 1月 | 校内研究授業3年 教科横断的な学習の提案 1年 教科横断的な学習の提案 4年 大阪府力だめしテスト ・児童アンケート・教職員アンケート |
| 2月 | 全体研修④（1年の研修をふり返って ・ 年間単元計画の見直し） 教科横断的な学習の提案 6年 力だめしテスト 採点・分析 |
| 3月 | |

実践校【熊取町立西小学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

テーマ「食に関する指導」を通じて家庭・地域とつながる西小っ子」

(2) 調査研究の内容

本校において食に関する教育については、「食に関する指導の全体計画」のもと、食における重要性や喜び、正しい知識や感謝、食を通じた人格形成など、地域の協力や外部講師、栄養職員などの協力を得ながら丁寧に学習を進めてきた。しかし、本調査研究事業を受けるまではそれぞれの取組みが独立したものになりがちな面もあった。そこで、令和元年度からこれまでの校務分掌の保健食育安全部「食育」にカリキュラム・マネジメントの視点を加え、研究を進める部会を「食育（カリマネ）」とし、この研究を通じてそれぞれの取組みを深めながら、より教科横断的なものをめざして、食に関する教育を推進していった。

令和元年度及び令和2年度について、年間を通じてこれまで取り組んできた食に関する行事等は踏襲するものの、各学年が食に関する課題を明らかにし、その課題解決に向けて教科や行事をマネジメントしていった。行事ごとにPDCAサイクルが適切に回せているかを確認し、ふりかえりを実施する。令和2年度はコロナ禍ということを配慮しつつ、そのふりかえりをもとにさらに充実した教科横断的な取組みを推進していった。また、食に関する教育にとどまらず、研究教科である理科、人権や福祉の視点からも教科横断的なつながりを意識した学習指導をめざし教科指導の質を高めていった。

令和元年度の取組みの発信と改善を目的とし、令和2年度は以下に示す取組みを実施した。

①カリキュラム・マネジメントに関する校内研修の実施

令和2年度は、4回の校内研修を実施した。第1回研修会では、カリマネ表による教科・領域間のつながりを「見える化」し、第2回研修会では、それを基に指導案づくりを行った。第3回研修会では、本調査研究の柱となる「食育」に焦点を当て、アンケート結果を基に各学年の食に関する課題を明確化し、課題解決に向けた行動計画を立てた。第4回研修会では第2回目の食育アンケートの結果から各学年の行動計画の成果と課題について考察した。各研修会の具体的な内容は次のとおりである。

■第1回校内研修『カリマネ表つながりが「見える化」作戦』

転任者や新採者もいるため教職員全体で「カリキュラム・マネジメントとは何か？」からはじめ、昨年度末に改善を図り作成したカリマネ表（単元配列表）の食に関する単

元等を線でつないだり、人的物的な体制を確認し、必要に応じて単元を入れ替えたり、行事の実施時期を変更したりした。研修後の教職員の「ふりかえり」は以下のとおりである。

【教職員によるふりかえり】

- ・学年の内容を食育でつないでみると、今まで意識していなかったところで各教科や単元とつながっていることを知りました。自分が意識することで子どもたちと学習する際の発問や声かけに生かせると思いました。
- ・食育の取組みとして、どの学年も1つ（例：2年さつまいも、5年米）の作物に注目し、栽培から収穫、調理、試食を体験する学習を実施してはどうだろうか。
- ・その教科だけではなく、他の教科とのつながりを考えて指導することができると思う。カリマネ表を作ることで、今までよりも意識するようになった。今後は、教科のつながりなどを考えてより効果的な順番などを考えていければと思う。
- ・カリマネ表つながりが「見える化」作戦を実行するために常に見えるようにしておく必要があると思います。もちろん表だけでなく、人的、物的な体制を明確にして、誰もがいつでも確認できるようにしたいです。

■第2回校内研修『校内研究教科（生活科・理科）とのつながりについて～学習指導案（ひな形）の見直しについて～』

研究推進部の研究主任と連携し、令和元年度の研究テーマからつながりを意識したテーマに変更し、令和2年度は研究テーマを「ともにつながり、ひびき合う学習をめざして～始まりと終わりのつながりをデザインする～」として研究を推進した。そして、研究教科である理科・生活科の単元と食育とのつながり、もしくは他教科や他学年とのつながりを意識した学習指導案を作成できるようにひな形を作成した。そのことにより教科横断的及び縦断的なつながりを意識できるようになり、年間6つの校内研究授業全てで、つながりを意識した指導案を作成することができた。その結果、授業の質に高まりがあったと考える。研修会後の教職員の「ふりかえり」は次のとおりである。

【教職員によるふりかえり】

- ・めざす子ども像が具体化して明確になるので、そのためにつけた力とそのつながりがわかりやすく、指導に生かせると感じた。
- ・「他教科とのつながりを意識した授業計画」を立てる上で、実践例が示されているのでわかりやすかった。授業、単元における始めと終わりのつながりや教科をこえたつながりを考えて授業を計画していきたい。課題（めあて）の確認やまとめの確認にも生かせるかと思います。
- ・同じ学年内の内容で、何の学習と何の学習が関連しているかが整理されているのがすごくよい（関連図）。片方をしっかり指導していれば、もう片方が発展的課題解決的に考えることができるという利点もある。支援学級の指導においても、自立活動の分野で社会的側面、理科的側面など様々な視点を入れ考えていきたい。
- ・正直すごく大変そうだと思います。事前に計画を立てないと本時につながらないと改めて感じたからです。まずはどの単元で研究授業をするかを決め、どのような他教科とのつながりがあるのかを考えようと思います。

■第3回校内研修『「第1回食育アンケート」や児童の実態から各学年の食に関する課題と課題解決に向けた行動計画を立てる』

表1 第1回食育アンケート結果（令和2年7月実施）

| 学年 | 検証項目 | 7月 |
|----|-------------------------|------|
| 1年 | (4) 好き嫌いせず、なんでも食べようと思う | 92.3 |
| 2年 | (4) 好き嫌いせず、なんでも食べようと思う | 86.4 |
| | (7) 食べる時のマナーを守ることができる | 95.1 |
| 3年 | (3) 食べものについて知りたいと思う | 76.7 |
| 4年 | (3) 食べものについて知りたいと思う | 82.9 |
| 5年 | (6) 食べものや作ってくれた人に感謝している | 95.5 |
| 6年 | (3) 食べものについて知りたいと思う | 75.5 |
| | (8) 地域の特産物を知っている | 79.6 |

(単位：%)

第1回食育アンケートの結果は表1に示すとおりである。この結果を基に、各学年の食に関する課題と課題解決に向けた行動計画を以下のとおり策定した。

- 1年生…野菜嫌いな子どもが多く、「野菜を食べるとどんないいことがあるのか。」「野菜を食べないとどうになってしまうのか。」など、家庭と連絡をとりながら指導を行う。〔給食指導、家庭とのつながり〕
- 2年生…自分たちで野菜を育て、自分たちの育てた野菜を簡単な調理をし、さらに野菜を食べると体にどのような良い影響があるかの指導をしていく。また、マナーに関する指導も行う。〔生活科、給食指導〕
- 3年生…食に関する季節の行事（節分、七草がゆ、土用の丑の日など）や旬の食べ物について紹介したり、調べたりする活動を実施する。〔道徳、社会科〕
- 4年生…食育指導において「栄養三色」取り入れることで食べものについて興味関心を持てるようにする。〔食育、給食指導〕
- 5年生…5年生の社会科の学習の米づくりを通して、生産者の思いや苦労を体験し、食への感謝の気持ちを育てる。〔社会科、総合的な学習の時間、地域とのつながり〕
- 6年生…栄養バランスや地域の特産物に目を向けて、給食の献立を考える活動を計画し、子どもたちの「食べ物」への関心を高め、地域の特産物のよさを再確認する機会とする。〔社会科、家庭科、給食指導、地域とのつながり〕

■第4回校内研修『「第2回食育アンケート」の結果から各学年の行動計画の成果と課題を考える』

表2 第2回食育アンケート結果（令和3年2月実施）

| 学年 | 検証項目 | 7月 | 2月 |
|----|-------------------------|------|------|
| 1年 | (4) 好き嫌いせず、なんでも食べようと思う | 92.3 | 97.5 |
| 2年 | (4) 好き嫌いせず、なんでも食べようと思う | 86.4 | 90.1 |
| | (7) 食べる時のマナーを守ることができる | 95.1 | 87.7 |
| 3年 | (3) 食べものについて知りたいと思う | 76.7 | 80.6 |
| 4年 | (3) 食べものについて知りたいと思う | 82.9 | 73.7 |
| 5年 | (6) 食べものや作ってくれた人に感謝している | 95.5 | 96.6 |
| 6年 | (3) 食べものについて知りたいと思う | 75.5 | 77.1 |
| | (8) 地域の特産物を知っている | 79.6 | 83.3 |

(単位：%)

第3回研修会后、各学年の課題解決に向けた取組みを実施し、その後、令和3年2月に第2回アンケートを行った。結果は表2のとおりである。各学年の取組みの成果と課題を以下にまとめた。

1年生…臨時休業の影響で6月下旬から、通常の学校給食が始まり不安そうな子どもも見受けられた。給食開始前には、他校の栄養教諭が作成した給食指導の映像を活用し、イメージをもたせることで、安心して給食に向かう姿が見られた。また、野菜に苦手意識をもつ子どもも多いため、家庭との連携を図りながら「野菜を食べるとどんないいことがあるのか。」などの指導を行った。日々の給食指導では、初めて食べるものや苦手なものでも、少しは食べるように声をかけ、食べられた時には評価してきた。子どもたちも互いに声をかけあい、給食を楽しむ姿が見られる。これらの姿が、「好き嫌いせず、なんでも食べようと思う。」の検証項目の向上に表れたと分析している。

2年生…生活科では、野菜を育て、収穫する学習活動に取り組み、さらに野菜を食べると体にどんないい影響があるか等を学習した。野菜の栽培や収穫の活動には関心をもって取り組み、野菜に親しむ姿が見られた。検証項目「好き嫌いせず、なんでも食べようと思う」は微増にとどまったが、当初の計画通り、簡単な調理・実食に取り組みしていれば、もう少し成果が見られたのではないかと推測される。

7月のアンケートの結果では、「食べる時のマナーを守ることができる」の肯定的回答率が高い。しかし、マナーについての知識や実際の行動に課題が見られた。そのため、食事のマナーを知るための〇×クイズなどを実施した。しかし、2月結果では、検証項目「食べる時のマナーを守ることができる」肯定的回答率は減少した。今後も継続的な指導が必要である。

3年生…7月アンケートの結果から食に関する知識について関心が低い傾向が見られた。そのため、食に関する季節の行事（節分、七草がゆ、土用の丑の日など）や旬の食べ物について調べ学習に取り組んだ。その過程で、社会科のスーパーの見学と関連させて行う計画であったが、コロナ禍の影響により見学は実施できなかった。検証項目「食べものについて知りたいと思う」については微増であったが、今年度の学習をきっかけに、給食で出される季節の献立等も活用し意識させていきたい。

また、2月のアンケート結果では、検証項目「地域の特産物を知っている」の肯定的回答が大きく増加した。社会科の地域の学習で、熊取町の特産物について取り上げた成果が大きいと考えられる。知識を得る過程で、食べ物に関わる人々の思いを知り、感謝の気持ちにつながったのではないかと考える。

4年生…「栄養三色に関する内容」を食育指導に取り入れることで、栄養や食べ物について興味関心をもてるよう取り組んだ。食に関する指導については、年度当初の計画通りには十分確保できなかったが、各教科の学習においても、食に関する学習との関連を意識して単元計画を立て、取り組んできた。

2月の検証項目では「食べることは大切だと思う」「毎日、朝ごはんを食べている」の強い肯定の回答が増加した。しかしながら、4つの項目で肯定的回答が減少している。今後も発達段階や児童の実態を考慮しながら、継続的に食に関する指導について多面的に取り組む必要がある。

5年生…1年間を通して、社会科および総合的な学習の時間において「米づくり」に取り組んだ。田植えや稲刈りなどの体験を通して、生産者の思いや苦勞を感じ取り、食への感謝の気持ちを育んできた。2月の検証項目「食べものや作ってくれた人に感謝している」において、強い肯定の回答が大幅に増加（73.9→87.4）し、「感謝していない」と回答した割合が0となった。生産に携わること（米づくり）を中心に家庭科や算数科、理科、さらには道徳や総合的な学習の時間等に関連づけて指導してきた成果と考える。また、子どもたちからは日常的に五大栄養素について話をしている様子がうかがえることも成果と考える。

6年生…家庭科の時間を活用して、「赤、緑、黄の栄養バランスのよい献立を考える。」「地域の特産物を取り入れた献立を考える。」をねらいとして授業を実施した。調理実習を行うことはできなかったが、これまでに学習してきた内容や、食に関する学習と各教科の関連を意識して授業に臨んできた。検証項目「食べものについて知りたいと思う」及び「地域の特産物を知っている」について、微増という結果であったが、「食べものや作ってくれた人に感謝している」の強い肯定や「毎日、朝ごはんを食べている」の肯定的回答が増加している。献立を考えることを通して、栄養の重要性や、自分の食事に関わる生産者や調理者とのつながりを感じ取ったのではないかと考える。今後も体験等を通して学びを深める機会を保障していきたい。

②公開研究授業の実施（指導案参照）

昨年度の取組みの成果を発信するために公開研究授業を実施し、本校の食育を中心としたカリキュラム・マネジメントの取組みの成果と課題を整理して報告を行う予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により、当初予定していた公開授業が中止となったため、授業の様子を動画で撮影し後日視聴することとした。児童のふりかえりシートの一部、及び教職員の協議内容等を以下に示す。

【児童の授業のふりかえり】

- ・ 日常を振り返ってみると、無機質をあまり体内に含んでいないことに気がつきました。学習を通じて、自ら無機質をとったり、ほかにも五大栄養素に関わる食材をできる限りバランスよく食べていったりしたいと改めて実感しました。
- ・ お弁当の時、毎日、ビタミンに赤、黄、緑色全てそろっていてお母さんすごいと思っています。また、五大栄養素もそろっています。これからも、五大栄養素をとっていきたいです。
- ・ 毎日、栄養のバランスを考えてご飯を作ってくれているお母さんに感謝します。

【教職員の協議内容 等】

- ・ 低学年のときに学んだことを思い出しながら考えていた。1年生からの積み重ねが大切だと改めて感じた。
- ・ 五大栄養素の分類について、子ども自身で分類し、全体で確認しただけでなく、その後お弁当の際にも確認できてよかった。「偏りのないように」とアイス、クッキーばかりにならないように今後も考えられる流れになっていた。
- ・ メニュー作り（予算）→（買い物）→（調理）と、本来は調理実習行うが、本年度はない。家庭に持ち帰り生活に生かすことのできる学習となればよい。
- ・ 春に行った田植え、秋の稲刈りと子どもからの「ご飯」という意見とのつながりが授業の中で示されていた。
- ・ 「五大栄養素から、自分の食生活につなげて考えてみよう」の発問から、子どもたちは、本時の学びから自身の食生活につなげて考えられたと思う。
- ・ 指導者の発問や言葉かけからカリマネを意識していることが感じられた。5年生は地域との連携のもと子どもたちの学習を深める機会が多く、学習の深まり（体験活動）が本時の学習につながっていたと思う。子どもたちからも以前学習したことと本時、そしてこれからの生活（学習）につながる感想がたくさんありよかった。

③P D C Aサイクルの確認

コロナ禍により授業時数の確保と進捗状況を確認するために、各単元、行事等の終了後、及び学期ごとにカリマネ表（単元配列表）をもとにP D C Aサイクルを確認

【各単元、行事等の終了後、学期ごとにP D C Aサイクルを確認した時の教職員の意見等】

- ・ 学期ごとにカリマネ表（単元配列表）の既習事項等にマーカーを引き、進捗状況を確認することは、全教科を意識することができてよかった。また、全学年が一斉に同じ作業をしたので、他の学年の取組みも確認できることはよかった。

- ・ 単元ごとに取組みをチェックし、ふりかえることはしていたが、カリマネ表を見ながらすることで教科横断的な視点をもってふりかえることができ、関連する単元等を再確認することができた。また、子どもたちに対する声かけもつながりを意識してできるようになった。
- ・ 行事の実施前後にカリマネ表を見ながら取組みをチェックしていった。カリマネ表を常に見えるところにおいていたので、行事がこれまでのどの学習とつながり、今後はどの学習につながるかの見通しをもつことができた。年度末には、その学年のカリマネ表を再確認し、次の学年につなげることが大切であると思った。
- ・ カリマネ表を媒体にして、学年のコミュニケーションが増えたと思う。経験の浅い教職員に対しては、今後の準備やどの学習につながっていくかをアドバイスしやすかった。

④ 2年間の取組みと成果を発信

2年間の取組みを冊子にまとめ、発信していく。（令和3年3月完成予定）

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

本調査研究事業を2年間受け、これまで課題であった、それぞれの取組みが独立したものになりがちであった面が、ジグソーパズルのように教科横断的な視点で取組みをつなげて考えられるようになってきたと評価できる。これは、各学年が教育計画をカリマネ表（単元配列表）に示し、「見える化」したことの成果であると考えられる。また、全学年のカリマネ表を縦のつながりで意識することによってブロックを組み立てるかのようにより学年を縦断した教科縦断的な視点で考えることができた。そういった面では、特に教職経験の浅い教員やはじめて担任する学年の教員にとっては、このカリマネ表（単元配列表）は有効であると評価している。

また、本調査研究事業を受け、改めて本校の課題を教職員全体で共有することによって、究極の目標は学校教育目標を実現することにあるという教職員一人ひとりの意識が高まったように感じられる。これは、これまで各学年が実践してきた取組みを踏襲するものの、その取組みの意義や目的、さらには実施時期を意識することによって、内容を精査したり、必要に応じて人的物的資源を確保したり、学年の実態に沿った内容に変えたりすることができるようになったところから評価している。さらに、令和2年度については授業時数の確保や教育内容の精選が余儀なくされた中ではあったが、カリキュラム・マネジメントの視点をもった本校の教職員全員が積極的に限られた時間で最大限の教育成果を達成しようと一丸になれたことも評価できる。

しかし、各学年が教科横断的な視点をふまえて教科指導や行事等を進めていたものの、食育（カリマネ）部会によるふりかえりを進めていく中で、以下に示す課題と課題解決の方策を考えた。

①委員会活動（給食委員会）の活動と各学年の取組みのつながりの検証

→令和2年度についてはコロナの影響により、積極的な委員会活動の実施が困難であった。そのため、令和元年度末に計画していた委員会活動をカリマネ表（単元配列表）

に示し、各学年の取組みを意識させようと計画したが、その成果を十分に検証することができなかった。令和3年度の課題となった。

②コロナ禍における「深い学び」の実現

→新しい生活様式や緊急事態宣言下で制限された学習活動を余儀なくされた。しかし、その中でも「深い学び」を実現できるような取組みが教職員一人ひとりの創意工夫により実践されてきた。これらの取組みを共有、検証していくことが必要と考える。

③本事業のテーマ「食に関する指導」を通じて家庭・地域とつながる西小っ子の検証

→②と同様の状況で例年行われている家庭や地域と連携した行事等を積極的に実施できなかった。家庭との連携については、つながりを意識し取り組めるよう、学年通信等を活用した。地域との連携については、例えば社会見学先を教職員が取材をし、写真や映像、現場の方の声を伝えることで児童の理解の支援につなげていった。しかしながら、実際に見学、体験した令和元年度の取組みと比較すると、視覚的な支援や伝聞による支援にとどまることで、児童の経験や体験から得られる理解については十分でなかったと考えられる。今後の社会状況を見極め、積極的に家庭や地域とつながっていけるような工夫を行うことが今後の課題と考える。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

| 月 | 取組内容 |
|-----|---|
| 5月 | 校内カリマネ研修（つながりを意識した学習指導案作成に係る研修会） |
| 6月 | |
| 7月 | 食に関するアンケート調査①（児童対象）実施、集計、分析 |
| 8月 | 校内カリマネ研修（食に関するアンケートをもとに各学年の食に関する課題を共有し、課題解決に向けた実践計画を立てる。） 第1回カリキュラム・マネジメント検討会議への参加 |
| 9月 | 校内カリマネ研修（公開研究授業に向けた指導案検討） |
| 10月 | |
| 11月 | 第2回カリキュラム・マネジメント検討会議への参加 公開研究授業の実施（変更：授業の動画を視聴し、校内で協議会実施） |
| 12月 | |
| 1月 | |
| 2月 | 食に関するアンケート調査②（児童対象）実施、集計、分析 校内カリマネ研修会（令和2年度のふりかえりと次年度への改善） |
| 3月 | |

実践校【 岬町立深日小学校 】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

テーマ「ひと・まち・つながる」教育

年間を通して全学年が教科を横断しながら自然豊かな岬町の特徴を活かしつつ、課題である「少子高齢社会」に対し、子どもが主体的に試行錯誤しながらより良い解決を導き出す。そのために、子どもが学校・地域・大学・行政・企業等と多様なかかわりを持ち、学びを広げ、深めることで郷土や地域に誇りや感謝の気持ちを持つことを目的とする。

- ① 岬町のまちの様子を学び、自然の豊かさや旧跡や名所、公共施設、公共交通について探究し、地域の生活を支える人々やその活動の大切さを知る
- ② 地域の資源として、地域の方と協力して栗拾い・ヒラメの稚魚放流・潮干狩り・田植え・稲刈り・郷土料理づくり等を実施し、岬町の自然の豊かさを知る。また、子どもをはじめ家庭や地域が豊かな体づくりを推進していくために学校が発信していく。
- ③ 高齢者や地域の人たちとのつながりを通して、豊かな人権感覚や知恵を身につけ、ともに生きる社会性を養う。

(2) 調査研究の内容

「ひと・まち・つながる教育」の実践と継続した学び

昨年度より「ひと・まち・つながる教育」をテーマに授業実践してきた。教科横断的な視点をもった授業づくりを継続しながら、新たな取組みを行った。今年度は、コロナ禍の中において取組みが制限される中、できることを工夫しながら、教科横断的な取組みを実践した。具体例は次の通りである。

i. 梅採り→梅干しづくり・梅シロップづくり→梅ゼリーづくり→梅花見学会

昨年度より地域の方の協力を得て取組んでいる。今年は天候により梅の収穫量が少なくなつたため、計画通りに進まなかったが、子どもたちは自然の状況を学び取り、少ない梅をどのように使っていくのかを考えることができた。地域の方からの提案で、秋に梅ゼリーを作る計画となった。岬町の海で採れる「てんぐさ」から寒天へ仕上げ、ゼリーづくりをした。新たな取組みが広がり、地域のことを学ぶきっかけとなった。また、2月に実施した梅花見学会では、昨年植樹した梅の成長を見たり、国語で学んだ俳句を披露したりするなど取組みを深めることができた。

ii. 水産技術センター見学、イルカウォッチング・タッチングプール、稚魚放流、海洋実習、漁港見学

春にヒラメの稚魚放流ができなかったため、地域の漁港の方に協力をえて、新たな取組みが広がった。漁船に乗って野生のイルカを観察することや魚に直接触れるタッチングプールなど、地元の海や地域を身近に感じる取組み実践につながった。特に6年生では、新聞社の方をゲストティーチャーに招き、新聞づくりについての出前授業を行った。今まで海洋や漁港について学んだことを新聞に仕上げ、地域へ発信することができた。岬町のことをより深く感じるために、6年生最後の取組みとして、「深日地区めぐり」を行った。

iii. 地域の祭りや文化を知る学習

地域の「やぐら保存会」の方々の聞き取りや昨年度から取組んでいる地方の方言調べ「深日地区のみに伝わる漁師の方言である逆ことば（さかことば）」をテーマに学習を深めた。さまざまな視点から自分たちの地域を知り、深めて学習につなげていくことができた

iv. 回数を重ねた取組み

今年度の特徴として、1年間の中で数回にわたり取組んで深めることができた授業があった。一つは「音楽づくり」の取組みである。数年前から交流のある音楽家の方に、「歌詞作り」「曲作り」を学んだ。合奏や合唱など楽しみながらの授業から取組みが広がった。この他、「やぐら保存会」の取組みについても同様である。見学会から地域の方の聞き取り、子どもたちのお手製やぐらづくりなど、発展させることができた。

v. 継続した取組み（科学教室等）

近隣大学（和歌山大学）との連携の一つとして、昨年引き続き「科学教室」を実施した。自然科学等に興味を持ち、探求する力を身につけることを目標にしている。全校児童が体験を通じて学ぶことができた。科学教室の実施前には、校内研修を行った。理科の授業を通じて子どもにどんな力をつけさせたいのか。科学する心を育てるために何が必要なのか。このような研修から、教員はそれぞれの取組みに対して、主体的に考え、子どもたちの力をどう育ませていくのかを考えるきっかけとなった。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策

「ひと・まち・つながる」教育によって、児童や教職員は教室を出て、様々な人との交流や経験を通して知識や技能を身につけ、学校での学習活動の充実へと往還させてきた。効果的な学習にするためには、教職員が地域の人的・物的資源をどのように捉え、把握し、つながるのか、そして、様々なつながりをどのように織りなしていくが最大のポイントであった。

一つひとつの取組みがどの教科や内容にあたるのか整理することができた。各教科でつけたい力が明確になることで、取組みの幅が広がっていった。体験を体験だけで終わらせないことや他領域や他教科につなげていくことを各教員は学ぶことができた。児童の成果物「ふりかえり」からも成長が伺える。

今後の課題や見通しとして、岬町や深日小の置かれている環境を地誌的視点（人口・産業・歴史・文化等）から客観的に見つめ直し、どのように活用することができるのかを考案する必要がある。学校と地域との連携を進めるにあたっては、日頃から、子どもたちのために学習できる環境はないかとアンテナを張って、積極的に外部とのつながりを求めていくことが大切である。時には、厳しいご意見をいただくこともあったが、真摯に受け止め、前向きに進めていくことで、少しずつ学校の取組みを理解してくれる輪が広がっていった。その土壌づくりをあきらめずにできるかどうかのポイントとなる。そうした人と人とのつながりの中で、じっくりと時間をかけて信頼関係を築きながら、「子どもたちにこんな力をつけたい！」という思いを共有して、めざす子ども像を一緒に考えて進めていくことで、効果的な連携ができると考えている。地域をあらためて見つめ直し、新たな取組を構築し、その取組みから得られる子どもたちの学びを、どのようにして教科等横断的につなげていくのかが重要と考える。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

| 月 | 取組内容 |
|-----|--|
| 6月 | ・梅採り（8日） |
| 7月 | ・生活習慣調査（1～6年） ・梅干しづくり、梅シロップづくり |
| 8月 | ・第1回カリキュラム・マネジメント検討会議への参加 ・イルカウォッチング・タッチングプール（6日・25日） |
| 9月 | ・水産技術センター見学・稚魚放流（9月11日） ・栗拾い（低・中学年）（28日） ・やぐら取組み①（28日） |
| 10月 | ・栗拾い絵画（低学年） ・運動会 ・ホームスタディウィーク |

| | |
|-----|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・地層見学（6年） ・やぐら取組み②（12日・19日） ・出前授業音楽づくり①（21日） ・海洋実習（5年）（26・27日） ・岬町まちたんけん（2年）（30日） |
| 11月 | <ul style="list-style-type: none"> ・第2回カリキュラム・マネジメント検討会議への参加 ・孝子の森体験（1・2年）（4日） ・新聞づくり出前授業（27日） （講師：幡 篤志氏（株）スポーツニッポン新聞社編集局報道部長） ・深日漁協見学（5年）（10日） ・社協見学交流会（10日） ・地域の方言調べ（6年）（12日） ・出前授業音楽づくり②（18日） ・梅ゼリーづくり（18日） ・岬の歴史館見学（3年）（27日） |
| 12月 | <ul style="list-style-type: none"> ・陶芸教室（6年）（17日） ・深日小交流発表会（5日） ・修学旅行（12月10・11日） ・やぐら取組み交流会③（4年）（14日） ・出前授業音楽づくり③（4から6年）（16日） ・植樹会（梅）（1年～6年） ・体力測定会（1年～6年） |
| 1月 | <ul style="list-style-type: none"> ・生活習慣調査（1～6年） ・書道出前教室（6年）（28日） ・地震津波訓練（21日） ・リモート交流（26日） ・校内研修会（カリキュラム・マネジメント研修）（27日） （指導助言：和歌山大学 貴志 年秀 特任教授） |
| 2月 | <ul style="list-style-type: none"> ・ホームスタディウィーク ・食育授業（4年）（4日） ・梅花見学会（19日・24日） ・地域の方言調べ（18日） ・科学教室（1年～6年生）（22日） （指導助言：和歌山大学 貴志 年秀 特任教授） ・大学生とのリモート交流（24日） ・地域めぐり（6年）（26日） |

3. 実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

(○：成果，●：課題)

【成果】

- 手引きの作成を通して、各実践校が
 - Why なぜ取組みを進める必要があったのか（実態・背景）
 - How どのように取組みを進めたか
 - Change どのように変容したか（学校・保護者・地域等）の3つの視点で、これまでの取組みを客観的に整理することができ、取組みを進める必然性を再確認したり、取組みの再評価・再検証をしたりすることができた。
- 各調査研究校のカリキュラム・マネジメント推進担当者が、府実施のカリキュラム・マネジメント検討会議に参加して情報共有をしたり、CMADでもある大阪教育大学の田村知子教授からの指導助言を受けたりすることで、お互いの取組みのよさや成果を自校に持ち帰って、取組みに生かすことができた。
- 学校教育の効果を検証して改善するといったPDCAサイクルを1年間という大きな期間だけでなく、学期や校内研究等の小さな期間でも行うことで、学校教育の効果を「常に」検証して改善するサイクルを構築することができた。

【課題及び考えられる改善方策】

- 各学年のPDCAサイクルによる取組みが、学校全体の研究を大きく前進させることができた一方で、各学年任せになってしまったり、それぞれの学年の成果を生かしたり、支援し合ったりすることが十分ではない場面がみられた。
⇒今年度まとめた手引きを参考に、各校の実態に合わせてPDCAサイクルのあり方を検討するよう促し、学年間の交流や「見える化」の取組みをさらに進め、それぞれの成果や課題を生かし合い、高め合えるようにする。
- 調査研究校の取組みについての手引きを通して発信することはできたが、新型コロナウイルス感染症対策により、集合形式のフォーラム等を実施して発信することが難しかった。
⇒「カリキュラム・マネジメントWEBフォーラム」を実施して、カリキュラム・マネジメントについて調査研究した好事例を紹介する。